

『高島炭鉱を訪ねて』

ヨゼフ 飛石 喬

東京に居たとき新聞で高島炭鉱が閉山になったという記事を読みました。短い記事でしたがなぜか切り抜いて持っていました。名古屋に来てまもなく、たまたま職場で高島出身の人から、高島が周囲三〜四キロメートルの小島であることを聞きました。そしてふっと思い出しました。神戸で受洗の年、熊本・長崎の教会のいくつかを巡り、写真集『西海の天主堂』にも接しましたが、高島教会の名前がなかったことを。

もしか、まさか教会住所録を見ると、巡回ながら確かに教会があります。二〇〇三年七月、休みを利用して訪れました。大波止から伊王島経由で三十五分。役場のそばに初めて石炭を発見した五島出身の「ごへい太」という人の名をとった宿を取り、貸し自転車車で島を回りました。

炭鉱の跡を見たかったのですが

坑道跡もありません。それも道理、高島は海底炭田だったのです。石炭資料館で坑道模型や写真の前に、館長さんから話を伺いました。坑道は伊王島方向へ長く延び、深さは約九百メートルまで、三層とのこと。閉山前一万六千人だった人口は八百人。島を去る悲しみを、時の小学生が文集にして保存してありました。前庭に炭鉱で使われていた重機が展示されています。高島の初代住人はどんな人々か館長さんに尋ねると、長崎の東彼杵の数家族、たとのことで、教会との関係までは掴めませんでした。

教会を訪問しました。タイトルはイエスのみこころで、庭には立派なルルドがありました。宿の方の紹介で、信徒の方に聖堂を開けて頂きました。閉山前、八百人だった信徒は今五十人とのこと。館長さんの話と、最近インターネットで得た情報を総合すると、高島信徒の祖先は宝暦年間（十八世紀半ば）に外海の檜山地区から迫害を逃れてきた数家族のようです。

最後の日、かつて炭住が林立していた、海を見下ろす丘陵の跡地

を巡りました。区画名と棟番号が書かれた杭が立っています。眼前に広がる青海のその底下で死と隣り合わせで働いていた人々のあつたことを思います。



小高い丘の上にある高島教会

城北橋教会と同じように「イエスのみ心」に捧げられている。宝暦年間、外海の檜山地区から、クリシタンが迫害を逃れて、この高島に移住してきたと言われている。